

## ルカによる福音書24章13-35節 「再び燃える心」

### 1A 失望した心 13-24

### 2A イエスに戻す 25-33

#### 1B 聖書の解き明かし 25-27

#### 2B 聖餐 28-35

### 本文

私たちは、これからイエス様の復活後、エマオという村に歩いていた二人の弟子の話を読みたいと思います。説教題を付けるならば、「再び燃える心」です。32 節にありますが、二人は互いに話しています、「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」心が燃えている、その燃える心が与えられた弟子たちから、私たちがいかにこの心を取り戻すことができるのか、また維持することができるのかを考えます。

皆さんがイエス様を信じたのは、いつぐらい前になるのでしょうか？それぞれですが、その歩みの中で「そのはずではなかった」というような出来事がおありになったと思います。これが、神の御心だと思っていたのに、まるで異なる状況の中に置かれてしまったと思っただけではないでしょうか？私もありました。何度もありました。今は、神の恵みによって、そのようなことが起こる度に、「主が何かを今、ここでしておられるはずだ」と信じるできるようになっています。それでも、自分があまり想像を超えてしまったもの、想定外のことが起こると、がっかりします。「このはずだったのに…」という期待外れ、これがこの弟子二人が経験したことでした。では、13-24 節までを一気に読んでみましょう。

### 1A 失望した心 13-24

24:13 ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。24:14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。24:15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。24:16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。24:18 クレオパというほうが答えて言った。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」24:19 イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。24:20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。24:21 しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、24:22 また仲間の女たちが私たちを

驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、24:23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」

今、弟子二人が歩いているのは、エマオという村に向かってであります。エルサレムから約11キロメートル離れたところです。働いてはいけないと命じられている安息日には、3,4キロしか歩けないことになっていました。ですから、この弟子たちは自分の家のある村に戻りたかったのですが、イエス様が死なれて、葬られたとは安息日の直前です。安息日を待って、それから夜が明けた日曜日に、自分たちの家に向かって歩いていったのです。

15節には、その返る途中で、「話し合ったり、論じ合ったりしている」とありますね。私もしばしば、話し合ったり、論じあったりしていますが、その話が暗いものになることはしばしばです。甦られたイエス様が近づかれると、彼らは17節に「暗い顔つきになって、立ち止まった。」とあります。そして、この箇所でもとても大事なのが、「ふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。」というところなんです。目が遮られていました。これはもちろん、肉眼のことではありません。彼らはイエス様を見ていました。けれども、霊的な目が遮られていました。私たちが何か、自分たちの期待通りになっていない現状を見る時に、そこで信仰をもって、「それでも、主がここにおられる。」という立場を取ります。ちょうど、それは目隠しをしているけれども、必ず自分のところにはこの人がいる、と信じるのと似ています。そのように信じれば、目が見えていなくとも、人の気配がし、話しかけると語ってくれるので、「確かにここに人がいるのだ」と理解することができます。けれども、信仰を持っていないと、「もう、主が私たちから離れてしまったのだ。」と判断してしまうのです。すると、心の目までが閉ざされてしまい、そこに落胆した思いのみが残るのです。

二人の弟子が期待していたものは、次の通りです。当時のユダヤ人たちは、ローマ帝国の支配下に生きていました。彼らは、バビロンの捕囚によって国を奪われてから、ずっと異邦人の国の支配下に生きていました。バビロンの次はペルシヤ、ペルシヤの次はギリシヤ、そしてギリシヤの後にはローマです。その虐げは、時を経ればそれだけ酷くなってきました。異邦人の支配によって自分たちが押しつぶされそうになっている、とっていました。しかし、彼らは期待していました。聖書には、そうした異邦人の支配からイスラエルの民を救われる方が来られることを預言していたからです。キリストが来られて、イスラエルを救われ、そして神の国を立てられることを神は約束しておられました。

そして、イエスが来られました。この方が、キリストが行なうと約束していた奇跡やしるしを行なっておられました。弟子たちは、この方こそキリストに違いないとっていました。そして、イエス様はエルサレムに向かわれました。エルサレムに入られて、そして主がローマの支配を打ち砕かれて、それでそこから神の国を支配されると期待していたのです。ところが、イエスはご自分の民、ユ

ダヤ人の指導者から捨てられました。そして、ローマに反逆しているという罪で、ローマに屈服する象徴であった、十字架刑に処せられたのです。ローマの力を打ち砕かれる、その奇跡の力によって砕かれると信じていたのに、かえってローマの力によって虐げられました。それで、彼らは主に従うのをやめてしまいました。一度、「もうこれで終わりだ」と決めてしまうと、心を堅くしてしまいます。それで、甦られたことを女たちが話しても、心が頑なになっているので、その声が聞き取れず、鈍くなっています。

私たちは、このように、自分ではどうしようもない力が働く時があります。しかし、敢えてその力に身を任せるのです。それは、ちょうど主ご自身が自ら、ローマの十字架に身を任せたのと同じです。自分に酷いことを言ってきた人がいるとして、言い返すことができるはずですが、けれども、憎しみに対して親切で返します。これは屈辱的でしょう、しかし、それでもそこに主がおられることを信じて、従うのです。一見、敗北のように見えるかもしれませんが、しかし、覚えておかなければいけなものは、「死を経ることによって、初めて甦る」ということです。キリストはご自身を無とされて、そして死なれました。死なれたからこそ、甦るその神の力に預かりました。同じように、私たちがキリストにあって無になり、自分に対して死ぬことによって、初めてキリストの復活の力を自分のものとするのです。

## **2A イエスに戻す 25-33**

しかし、二人の弟子はイエスが死なれたことによって、心を頑なにしてしまいました。死んでそれでイエスはいなくなった、と決めてしまったからです。そこから、イエス様はどう彼らを回復させるのでしょうか？それは、「聖書の解き明かし」からでした。

### **1B 聖書の解き明かし 25-27**

24:25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。24:26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

イエスご自身が、イエスご自身について旧約聖書から語られています。主は何度となく、ユダヤ人たちに対して、旧約聖書はご自身を証しているものだと言われました。「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」私たちは、イエス・キリストを知るのにこの分厚い聖書の中で福音書しかないと思ったら、大間違いです。イエス様は他の箇所では、「わたしは律法と預言者を成就するために来た。」と言われました。イエス様こそが、旧約聖書の中心なのです。したがって、神は二千年近くの歳月をかけて、何十人もの人たちに啓示を与え、このイエスが誰なのかを示していかれたのです。「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。(ヘブル

1:1-2)」

ここで主が強調されているのは、「すべて」という言葉です。25 節にも、27 節にも、「すべての預言者」そして「聖書全体の中で」と、全てを強調しています。弟子たちは、聖書は信じていたのです。信じていなかったのではありません。問題は、全てを信じていなかったのです。ここが大きな違いですね、全てを信じるというのは、創世記から黙示録までに啓示されている、神のご計画全体に自分を精通させることに他なりません。パウロは、このことのために労苦しました。「使徒 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」どこかを信じて、それで終わりではないのです。全てに渡ってそれが神の言葉であり、その全体を信じることによって、自分は良き神の働き人として整えられます(2テモテ 3:16-17)。

ここでイエス様が強調されたのは、弟子たちが信じていなかった部分です。「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて」ということです。彼らは、キリストが栄光に輝く主として、異邦人の国の力を滅ぼし、神の国を立てられるということは信じていました。しかし、それが、十字架のような苦しみを受けて、それから初めて栄光に入るということを信じていませんでした。しかし、聖書全体にはその流れがしっかりとあるのです。

主は、アダムが罪を犯してから、すぐに「女の子孫」によって蛇の子孫の頭を打ち砕くと約束されました(創世記 3:16)。そして、アダムとエバに、皮の衣によって服を着させました。つまり、彼らの罪から来る恥を覆うために、自分たちの行いではなく、神のくださる、血によるいけにえによって、その罪を赦すことをお決めになったのです。そして主はアブラハムのことを語られたでしょう。自分の愛する独り子イサクを捧げなさい、と主は命じられたのです。アブラハムは、彼に木を負わせて、そしてモリヤの山で彼をほふろうとしたのです。そのモリヤの山の近くで主は十字架の木を負われ、そして十字架でつけられ、罪のためのいけにえとなりました。

それから主は、過越の祭りを語られたことでしょう。家の門柱と鴨居に子羊の血を付けて、その血を見た天使が、災いを過ぎ越すのです。それでその家の男の子は神の裁きを受けないですみました。同じようにして、キリストは小羊のように血を流され、その血の中にいる私たちは、神の裁きを免れることができます。さらにイエス様は、モーセの律法にあるいけにえの制度を語られたことでしょう。その犠牲の制度はすべて、罪の赦しのため、神に近づくために身代わりのいけにえが必要であることを示していました。

そして、イエス様は預言書をたくさん語られたことでしょう。イザヤの預言には処女からキリストが生まれること(7 章)、そしてこの方が、「9:6 不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれること。けれども、53 章が預言したように、鞭打たれ、傷つき、人々の罪のために死なれること。これらを語られたでしょう。詩篇 22 篇は、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という言葉から始まりますが、イエスが死なれる前に十字架上で叫んだ言葉です。

そして、ダニエル書 9 章には、七十週が定められていて、七週と六十二週、すなわち 483 年後にメシヤが断たれ、とありますが、キリストが殺されることが預言されています。エルサレムを再建した時は 445 年ですが、それから 483 年後、計算すると大体、紀元後 30 年辺りになります。キリストが死なれる時期まで予告してあるのです。

そして、苦しみを受けてから栄光に入るということは、人物の中にも見出されるものです。ヨセフの生涯がそうでした。ヨセフが兄たちに受け入れられる前に、彼は兄たちに妬まれ、奴隷としてエジプトに売られました。それから後でエジプトの指導者となってから兄たちが彼の前でひれ伏したのです。そして、ヨセフを兄たちが売ったのは、実はヤコブの家族を救うためであったという壮大なご計画の一部でした。同じように、イエスは兄弟たちユダヤ人から捨てられます。しかし、イエスは異邦人の間で受け入れられます。そして再び来られる時、この方は栄光の姿できますが、その時にユダヤ人はこの方をメシヤとして受け入れるのです。同じようにモーセも一回目、40 歳の時はイスラエル人に拒まれて、ミデヤン人のところに住みました。二回目、80 歳の時にイスラエル人は彼を自分を救ってくれる指導者として認めました。ダビデも同じです。彼は油注がれたにも関わらず、サウルに追われる身でありました。しかし、主はダビデを立てられ、ついに王とされました。イエス様はユダヤ人の王なのに、ユダヤ人に殺されます。けれども、後に王として君臨します。初臨において苦しみ、しかし栄光の姿をもって再臨されるのです。

## 2B 聖餐 28-35

このようなイエスが解き明かしをされている中で、彼らの心も変えられていました。

24:28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。24:29 それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。24:30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。24:31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。24:32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

弟子たちのほうからイエスを引き止めました。イエスと離れたくない、いっしょに時間を過ごしたいのですという願いです。ここに熱意があります。そして、彼らの目を開かせた決定的な瞬間は、イエスがパンを取って、それを裂いて、渡されたところにあります。主との親しい食事の時間、このことを弟子たちはそれを最も親密な一時でありました。そして最後の晩さんでは、ご自身の流される血が、新しい契約のしるしであると言われました。それで初めて、目が開かれたのです。私たちが主と親しい交わりをする瞬間、その体と血にあずかる時、私たちは主のご臨在にあずかることができます。

そして彼らが互いに話すのです、主が語られ、聖書を説明しておられた時に、私たちの心は燃えていたと。それで、彼は主ご自身に目が開かれたと。十字架で死んで、それで終わりではなく、実はその十字架の延長で主の栄光があるのだと。このことを悟って、それで心が燃やされたのです。私たちに与えられているのは、この再調整です。主と共に歩んでいるつもりが、目が主から引き離されていた。けれども、聖書の説明を聞いているうちに、そして聖餐に預かる中で、主ご自身の臨在と、神のご計画全体を知らされることによって、私たちの堅くなっていく心はもう一度やわらかくなり、心を燃やされるのです。

24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、  
24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。24:35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。

主が生きておられることを証しました。このことを、私たちも証します。キリストが形造られるところにある喜びです。私たちが弟子たちと同じように、主が生きておられることを互いに語り合い、分かち合う時に、そこに主ご自身がおられるのです。